令和元年1月29日

令和元年度「書くこと」部会　　第2回総会資料

「書くこと」部会　令和元年度の研究報告

書くこと部会部長：青山中学校　一川　宗弘

１．今年度の研究の方向

【めざす生徒の姿】

・「もっと知りたい」「書きたい」と，魅力や必然性を感じ，見通しをもって主体的に学習に向かう姿
・論理の展開や表現の仕方，効果について考えたり，吟味したりして，自分の考えを書く姿
・対話や議論を通じて，自分のものの見方や考え方を広げ，自分の表現に生かしていく姿
・「こうすると～な文章が書ける」「確かによくなった」「もっと～な書き方を知りたい」と実感をもつことができる姿

書くこと部会研究主題

相手，目的や意図，場面や状況に応じて，考えが伝わる文章を書く能力の育成

～論理の展開や表現の効果を考え，工夫して書くことができるための指導の在り方～

【研究仮説】

・「この題材・この時間でしか付けることができない力」とは何かを明らかにした上で，指導事項を明確にし，魅力や必然性のある題材を設定すれば，主体的に学習に向かう姿を育成することができる。
・単元や単位時間において仲間との対話や議論を通して，論理の展開，表現の仕方や効果について考えたり吟味したりする言語活動を意図的に仕組み，個に応じた指導・援助を行えば，自分の見方や考え方を広げ，伝えたい内容を工夫して書く能力を育成することができる。

研究内容

（１）指導計画の工夫

①「言語活動一覧表」及び「言語活動具体化一覧表」をもとにした言語能力の明確化
②生徒が魅力や書く必然性を感じる題材の工夫

（２）指導・援助の工夫

①「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた指導過程の工夫
②「苦手を克服する手立て」「得意を伸ばす手立て」等，個に応じた指導・援助の充実

（２）評価の工夫

①単元の終末における自己の高まりを実感できる評価の在り方

（２）主題設定の理由

平成３０年度全国学力・学習状況調査報告書には，調査結果について「伝えたい事実や事柄が相手に分かりやすく伝わるように書くこと」に弱さがみられると述べられている。また，「目的に応じて文章を読み，内容を整理して書くこと」や「相手に的確に伝わるように，あらすじを捉えて書くこと」にも課題として挙げられている。「書くこと」の学習においては，各学年 20 時間以上は配当することとされているものの，同領域の授業の中だけでその力を定着させることは，極めて困難であることは，誰もが感じることではないだろうか。他領域との関連を図りながら指導していくことが大切だと痛感した。

さらに，同報告書では，「目的や意図に応じて相手に分かりやすく書く指導の工夫」について，「分かりやすい説明や具体例を加えたり表現しようとする内容に最もふさわしい語句を選んで描写を工夫したりするように指導する必要がある。」と述べられている。与えられた言語活動をこなす授業ではなく，生徒が，相手，目的や意図，場面や状況の応じて多様な形式の中から選択し，主体的に伝える姿を追究していくことが求められる。付けたい言語能力に応じて，どう題材を設定すると生徒が必然性を感じて書く学習に向かうことができるのか，どのような学習形態，学習方法，学習過程，指導・援助が有効なのか，何をもって評価するのかについて実践を通して研究し，生徒に，「相手，目的や意図，場面や状況に応じて，考えが伝わる文章を書く能力」を育成することを目指した。

２．今年度の実践報告

（１）授業実践

実践１　　第１学年「絵画に隠されたよさを鑑賞文で伝えよう」

岐阜市立加納中学校　　梅田　佳宏　教諭

研究内容①　指導計画の工夫

本単元を進めるにあたって，「言語活動具体化一覧表」の実践を「何を」，「どう書くか」という視点でアレンジした。見出しの単元について，美術室前に飾ってある先輩の絵画を題材にし，身に付けさせたい力を，「作品を通して自分が感じたことを，根拠を明確にして相手に伝わりやすく書く力」とした。

単元の導入で，「絵画を鑑賞することが苦手な生徒が多い。少しでも多くの生徒に絵画のよさを知ってもらいたい。力を貸してほしい。」と，美術科教師から生徒に依頼してもらい，書く必然につなげた。そして，「絵画に隠されたよさを鑑賞文で伝えよう」という言語活動を設定した。

研究内容②　指導・援助の工夫

よさを感じる感覚は，主観的で個人差が大きいため，どのように表現することが効果的かを考え，仲間と意見を交わしながら吟味できるよう，単位時間ごとにペアや習熟度の小集団学習を仕組んだ。さらに，個に応じた指導・援助として，「構成の検討」「考えの形成・記述」において，苦手を克服する手立てを講じた。

「構成の検討」では，美術の授業で学んだ造形的視点を，鑑賞文を書く上での観点として，「構図・配置」「描かれているもの（対象）」「色彩」の三つに沿って，付箋を使い，整理したり，絵画を印刷したものと，自分が見つけた特徴や感じたことを，丸や線で結び，つながりを見やすくしたりした。

「考えの形成・記述」では，一つの手立てが苦手な生徒だけでなく，得意を伸ばす手立てにもなるよう工夫した。伝えたいことを同じにした例文を二つ準備し，根拠の部分に違いをもたせた。「モデルＡ」は，作品の特徴・感じたことのみのもの，「モデルＢ」は，作品の特徴・感じたことに加え，感じたことを補足する説明を書いたものを提示した。二つを比較し，小集団で違いを考えることを通して，苦手な生徒は書き方を理解し，得意な生徒は自分の経験や知識などと結び付けながら補足説明を加え，より効果的に伝えたいことを文章に表すことができた。

研究内容③　評価の工夫

単位時間の終末において，本時の学びの深まりを自覚できるようなまとめを伝え合い，記述する活動を設定した。本時の課題に対するまとめだけでなく，「仲間との交流を通して広がったり深まったりした考え」についてペアで話した後，ノートに記述した。こうした振り返りを積み重ねたことで，生徒は対話や議論を通じて広がったり深まったりした自分の考えや表現の仕方に気付くことができた。

また，単元の終末には，第一時に書いた鑑賞文と最終的に書き上げた鑑賞文を読み比べ，「根拠を明確にして書くためには」と，書き方に焦点化した振り返りを行うことで，生徒は学習における成果を実感することができた。

実践１　　第１学年「根拠を明確にして書こう～鑑賞文を書く～」

足立 達恵教諭［高山市立清見中学校］　　佐藤 智貴教諭［高山市立松倉中学校］

様々な文章の形態がある中で，「鑑賞文」という形式は，音楽や美術など，他教科の学習活動にも生かせるものである。その一方で，どのように書くとよいのかを他教科の学習の中で行うことはあまり無いように感じる。そこで，「『鑑賞文』とはどのような文章なのか」「どんなことを大切にして書くとよいのか」を明確にすることをねらいとした。

そのために，教科書の作品（ルノワール作　ムーラン・ド・ラ・ギャレット）を参考に，鑑賞文を書くための観点に気付くことができるようにした。同一作品をもとに「楽しい様子」が伝わる理由を作品の特徴から探し，交流した。そして，それらを内容ごとにまとめていくことで，「魅力」という抽象的な感覚を相手に伝えるためには，「特徴・要素」といった具体的な観点が必要だということを意識化することができた。

清見中学校では，構成を考える時間において，絵の特徴について気付いたことを付箋に書き込み，それをワークシートに貼り付ける学習活動を行った。また，教科書の例文だけでなく，複数の作文例も提

示した。こうすることで，自分のイメージに合った構成や内容の組み立てを参考にすることができ，書くことに苦手意識があった生徒も意欲的に学習に取り組むことができた。

また，松倉中学校では，生徒の実態に合わせて，「具体的な事実からどう感じたのか」「「それはどのような観点で見るとわかるのか」など，穴埋め式のワークシートを作成した。そうすることで，根拠と意見のつなぎ方に気付いたり，まとまりごとの役割を意識付けたりすることにつなげることができた。

実践３　　第２学年「根拠を明確にして意見を書こう～意見文を書く～」

保木 季菜教諭［飛騨市立古川中学校］　　志洞 功　教諭［高山市立北稜中学校］

田中 彩子教諭［高山市立松倉中学校］

「意見文」を書くにあたって，「どんな題材で書くのか」ということは非常に大切になる。そこで，実生活につながる題材を設定することで，生徒の学習意欲の向上につなげた。

具体的には，学校生活と結び付けた「生徒会からの依頼を受けて，来年度の体育祭の新種目を提案しよう（古川中）」というテーマや，総合的な学習の時間とのつながりを考えた「地域がさらに発展するために必要なこと，ものは何だろう（北稜中）」「職場体験学習でお世話になった方に『魅力ある農業につながるアイデアだ』と納得してもらえる意見文を書こう（松倉中）」などのテーマを設定した。

観点別にまとめたワークシート

その中で，古川中学校では，実際に生徒会長からの依頼メッセージとしてビデオを作成した。「来年度の体育祭を，自分たちの手で種目から考えよう」と呼びかけたことで，「相手意識」「目的意識」が具体的になり，生徒たちに学ぶ目的と必然につながった。

また，北稜中学校では，「読む人に思いが伝わる意見文を書くことができる」というねらいに迫るために、「構成は双括型（意見・根拠・反論・反論に対する考え・意見）」「意見を支える根拠を具体的（名称や数値など）に示す」という条件を設定することで，書き方に戸惑うこと無く，主体的に活動に取り組むことができた。

松倉中学校では，構成を考える時間において，「どのような事例を二つめの根拠として取り上げるとよいのか」という課題で，自分の主張に合わせた事例の取り上げ方を吟味して選択する学習をした。「消費者の声①」という一つ目の事例に対して，「A･･･消費者の声②（同じ視点の事例を並列で並べ，理由につなぐ）」「B･･･インターネットの利用状況（一つ目の事例について，別の視点からの事例を挙げる）」のどちらがより説得力が増すかを考えた。「どちらの書き方が正しいか」ではなく，それぞれの効果を考える学習を仕組んだことは，その後，主張や相手に応じて根拠の内容を選択することにつながった。

３．今年度の成果と課題

○生きてはたらく言語活動一覧表を活用し，生徒に身に付けさせたい力を明確にしたことで，生徒に書く必然性のある授業を構想でき，生徒も主体的に授業に取り組むことができた。

○単元導入時に，それぞれの文章形態の目的や方法を明確にすることを意識したことで，「どのような場面で生かされる学習なのか」がわかり，主体的に学習に向かう姿につなげることができた。

○小集団交流を位置付け，生徒同士の対話や議論の場を意図的に設定したことで，互いの考えを聞きながら思考・判断し，自分の構成や表現を変えながら，根拠を明確にして書く生徒が増えた。

●根拠として挙げた内容や表現が，自分の伝えたいこと根拠としてふさわしい内容や表現かどうかを相手，目的や意図に応じて吟味する力を伸ばすための指導の在り方を，さらに深めていきたいです。

●ワークシートや比較資料については，より多くの実践を重ねることで改良を図っていきたい。また，「得意を伸ばす手立て」についても研究会の折に共有化を図っていきたい。